

琉球大学学術リポジトリ

ハニ族の棚田

－千年の労作から世界文化遺産候補へ－

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2011-07-21 キーワード (Ja): ハニ族, 棚田, 農耕儀礼, 世界遺産, 農具, 雲南 キーワード (En): 作成者: 黄, 紹文, 稲村, 務(訳), Huang, Shaowen, Inamura, Tsutomu (trans.) メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21233

Ⅲ ハニ族における棚田農耕の作業と管理

1 棚田の農事暦

ハニ族はその長い棚田農耕の活動に伴って、豊富な生産経験を積み重ね、その結果として一連の棚田の農事暦を創り出した。季節の様々な変化に照らして農事、祭祀および家庭生活をうまく配列している。『哈尼族四季生産調』（ハニ族の四季の生産の歌）によると、ハニ族の農事暦の基本的な内容は、季節の移り変わりが1巡することから年を数え、月の満ち欠けから月を数え、十二支で年、月、日に命名していることがわかる。その推算方法は旧暦10月を正月とし、10月を虎の月としている。そのため、月の順序は虎、兎、龍、蛇、馬、羊、猿、鶏、犬、豚、鼠、牛の順になる。日の順序は鼠が最初で虎、鼠、牛、兎、龍、蛇、馬、羊、猿、鶏、犬、豚、鼠と数え、13で1巡とする。1年は12ヶ月で、それぞれの月は30日で、1年は360日としている。残りの5日は年越しの行事の時期としている。季節の変化に基づき、1年は3つに分けられる。1つはオドゥバラhholduv ba'laといい（乾季、旧暦2～5月に当たる）、2つ目はゼオバラsseilhol ba'la（雨季、旧暦6～9月）、3つ目はツェガバラceivqgavq ba'la（冷季、旧暦10～1月）である。

ハニ族の農事暦は季節の変化に基づいているので、棚田の農耕作業の順序と段取りは植物や動物の出現に特に敏感である。月が替わっていくのにはすべて動植物の徴があり、山のノザクラが赤々とした花を満開にさせると旧暦10月が来たことを意味する。それはまた、冬（冷季）が来たことも意味し、棚田での段取りとしては稲株を犁起こし、畦を新しくするという一犁一耙の農作業をする。10月を過ぎると、冬（冷季）になる。冬は気候が寒くなり、ハニ族はこのころ昼と夜の長さが同じくらいになると考え、ハニ語ではトズTaoqciivqといい、「^{ふし}節」を意味する。ハニ族はこの時は太陽と月が睦まじい時期と考え、1年の始まりでもある。この日から数えて45日後に、「雷神が目覚める」日で、立秋のことでもある。天上で春雷の第一声が轟く。これから冬が過ぎて春となり、ジョザザJaoqzaq zaqの儀礼が行われる。湯円（団子）を作り、祖先と火の神に捧げる。

この時期はかつて新年であった。ハニ族はベクアマbeilkuq aqma（ホトトギスの一種）あるいはカッコウを正月に春を告げる天神の鳥とみなしている。このころは、河谷に桃の花が咲き、村の傍の梨の花が咲く。トズTaoqciivqの後、春雷が轟き、自然の季節の移り変わりが人に春耕の準備に入ったことを知らせる。

2 棚田の農作業の順序

「三犁三耙」（3回犁き起こして3回代掻き）がハニ族の棚田耕作の基本的手順である。しかし、「三犁二耙」でやっている棚田が多い。様々な高度の地区なので稲の収穫時期は前後するが、「一犁一耙」の作業が、普通旧暦9月中下旬から10月中下旬に行われる。その頃収穫が終わるとすぐに稲株を犁起こし、これをハニ語でシャハブXalhavpuvといい、上の方の田を犁起こすという意味である。稲株を犁起こした後の作業は畦を作ることで、犁起こした泥を鋤で田の中から畦に上げて畦を作る（写真2）。田の大小に応じて、畦の幅は15センチから1メートルと様々である。シャベルやスコップを使って畦の壁面の雑草を除いて田に入れ（この作業は田の鼠害の防



写真2 畦を作る



写真3 犁で田を犁く



写真4 田植え前の耙での田の代掻き
(訳者：牛に色を塗るのは珍しい。ハニ族の牛への愛着を物語る写真)

止と稲穂が黄色く実る時の通風を良くすることで収穫前にやり終えておく) 畦を新しくする。水を張ったら、また代掻きをし、稲株や雑草が水面に出てこないように田の中に半年近く浸しておき、自然に腐敗させ土壌の肥力を強くする。こうして「一犁一耙」の作業は基本的に終わりである。ハニ族の諺には「男が10月の末を過ぎて田を犁けば、下に犁くと野クワイは死なず、上に犁くと野クロクワイは死なない」とある。畦を整え、田の水に稲株や雑草を浸したら代掻きの作業は普通終わりである。中には半年近く棚田を休閑させその間に魚を飼って副産物を作るところもある。

旧暦2月のアマト祭りの後、棚田は「二犁二耙」の作業に入り、田を犁いて平たく均す。土を軟らかくし、水漏れを起こしている畦を修理し、田の中に一定の水を保持する。棚田は細波にキラキラと輝く景観を呈する。

「三犁二耙」(3回犁き起こして2回代掻き)あるいは「三耙」(3回代掻き)という耕作の段階は旧暦2月下旬から4月の田植えの時期のことである。このころ犁き起こしと代掻きは、田植えと同時進行である。当然順序は犁き起こしてから代掻きであるが、目的は犁き起こした土を平らにして田植えをしやすくするということである。高山地区の棚田では一般に代掻きをした後、泥止めをして、その日の内に田植えをしなくてはならない。1枚の田を代掻きしたらすぐにその田に田植えをしなくてはならないというのが原則である。男は犁き起こしと代掻きの他、苗代から苗を抜きそれを運び、女は田植えを担当しなくてはならない。それゆえ「女は田の犁き起こしをせず、男は田植えをしない」というハニ族の諺がある。

海拔の異なる地区でも、旧暦2月のアマト祭Hhaqma tulの前後に苗代と種まきのなど重要な農作業を行うが、詳細は苗代の管理の項に譲る。現在は人手不足や兼業のため、棚田の制度にも明らかな変化があり、「二犁一耙」あるいは「二耙」しかやらないとか、田植えの前日に「三犁二耙」の作業を一気にやってしまうということすらある。



写真5 畦を作る



写真6 畦を作る

旧暦3月下旬から4月は棚田の田植えの最も忙しい季節である。ハニ族の棚田は1年に1度実る一期作であり、秋の収穫の後は休耕する。苗代田は村のはずれにあり、田植えの後、稲は植えない。自分の田のうち中央の大きな田に苗代田を作り、田植えの後にもまた稲を植えるというところもある。ほとんど手で1~2株ずつ田植えをし、株と株の距離は無規則である。旧暦2月に種まき、4月に田植え、9月上旬から10月上旬までが収穫である。苗の分蘖(ぶんけつ)は土壌、地味、温度などの自然条件が影響するので、高山、山腹、河谷など海拔の異なる地区では植える密度が異なる。しかし、植える密度が比較的低いのがハニ族の棚田の共通の特徴である。海拔800メートル以下の河谷地域は土が肥えていて、株と株の距離が30センチくらいで80~90に分蘖する。海拔800~1,500メートルの山腰の地域では株と株の距離が25センチくらいで20~60に分蘖する。海拔1,500メートル以上の高山地域では、株の距離が15~20センチで、土が肥えている所では40~60に分蘖があるが、一般的な土質のところでは分蘖は

20~30程しかない。水稻の平均的な発育期は120日である。

旧暦5月のミネナMiqnieiq Naq (ニャアナNiaqhhaq Naqともいう)の後、棚田は夏の管理である中耕の段階になる。一般的には、田植えから10日ほどで新芽が出始め、25日ほどで田の中の除草を1度し、苗が穂をつけるころに2回目の除草をする。この時期は稲の苗が稗に似てくるので容易に区別できる。稗は稲と水肥を取り合ってしまうので重点的に抜かなければならない。そのほか野クワイや細葉草deimamuq (学名不明)など水生植物の根も張ってくるので、2度目も除草はかなり大変である。旧暦6月クザザKuqzaq zaqの祭りは盛夏の印であり、この頃、麓の棚田では稲が穂を付け始め、開花する時で、畦の草を除草する。旧暦7月は、魔よけの儀礼をして、人畜の疫病、田に虫害がないように祈り、同時に脱穀船^{訳注4}を用意し、田の間の道を改修する。

^{訳注4} 原文は「谷船」であるが、翻訳例に倣って「脱穀船」とした [尹1999 [1996] :534-554]。



写真7 草取り



写真8 脱穀船 記者撮影2003年元陽新広坪



写真9 秋の稲刈り

稲穂が黄色になると、稲の見回りが棚田の管理の主な仕事となる。毎日、田に行って稲が倒れていないかどうか見回り、倒れていたら起こし、数株の稲を縛って三角錘のようにして簡単にまた

旧暦8月、田は金色に輝き、千里に芳しい香りがする。ハニ族は新米祭りをした後、緊張した収穫の作業に入る。一般的には旧暦の8月中旬から9月下旬が棚田の収穫期である（現在の交配種の場合、収穫期が早くなる。）収穫の時、女性は刈り取りを担当し、男性は脱穀をする。脱穀の方法は稲束を直径20センチくらいずつ束ねて、脱穀船の両端の枕木の上に束をぶつけて脱穀する。稲藁は畦の上で乾した後、田の一角に積んでおいて更に乾燥させて家に持ち帰る。屋根を改修し、冬の寒い時期の牛の飼料にする。稲粃の運搬は男女で行い、麻袋に入れる。男性なら50～70キロ、女性でも40～50キロは担ぐ。河谷一帯の棚田と村落は2～3時間かかる山道が多く、稲粃を持ち帰るのはかなり骨が折れるけれども、習慣では脱穀した米はその日の内に担いで持ち帰らねばならない。

これまでハニ族が長い歴史のなかで伝統的にやってきた伝統的な品種の稲についての農作業の順序を述べてきた。現在海拔1,300メートル以下の地域では交配種の新品種が植えられており、時期や耕作の順序は変化している。

3 棚田の管理

(1) 本田の管理

田植えの後から稲刈りの前まで、棚田は一定の水で満たされていなければならない。そのため、田の水の管理が棚田の管理の重要なポイントであり、足しげく棚田を見に行かなければならない。それは水が枯れていないかどうかということを見に行く一方で、田の水が多すぎて稲が埋没したり畦が壊れたりしていないということも見に行く。田植えをして10日も経つと苗が青々と育ち始めるが、25日経つと1度草取りをしなくてはならない。田植えをしてから穂が実り始めるまでに2回目の草取りをする。



写真10 稲を縛って倒れにくくする



写真11 田に入れられた緑肥

倒れないようにする（写真10）。稲の花が咲くころ、曲形鉋で畦や田の周囲の雑草を刈り取る。そうすることによって、風通しを良くし、稲穂が受粉し光合成をするように保つ。

（2）苗代の管理

苗代の管理は、田の犁起こし、畦の壁を掘ること、畦の下の方を整えること、代掻き、緑肥の刈り取り、緑肥を踏みつけること、苗代作り、籾を水につけ発芽させること、籾蒔き、苗の抜き取りなどの作業を含んでいる。

苗代田は比較的固定しており、管理のため、紅河県や元陽県の勝村郷や新街鎮などのハニ族は村の周辺に作り、田植えの後はそこに植えることはしない。元陽県小新街の者台村などでは、ハニ族は棚田の上の方の丘に1つの苗代田を作っている。彼らは毎年稲刈りが終わるとすぐに、畦の雑草を取り、畦を整え、稲の切り株を犁起こす。その後、山から馬虎草（和名不詳）*zeeqkeeqpavq*、シラン *milc aq haqseil*、カンレンボク *zeeqkeeqpavqma*、ヨモギ類 *eilhaq* などの青葉の緑肥を田に入れ、人の脚で踏みつける。そして、それらが水に浸ると、やがて腐敗して有機肥料となる。

ハニ族は籾を注意深く選ぶ。秋の収穫期に、棚田の中の稲の育ちの良いものを1束ごとや1本ごとに取り、実のしっかり入った種籾を選ぶ。種籾を選ぶ時は、一般に九分どおり実ったところが良く、成熟しすぎると発芽率がすべて低くなる。種籾は家に持ち帰った後、中で乾燥させて密封された竹筒や箱の中に入れて、ネズミの害に遭わないようにする。元陽県の箒口村では正月10日ごろ種籾を水に浸し、水中に3日置いてから掬い取り、通気の良い

箆の中に3日置いてから苗代に植える。50日くらい経つと、田植えができるようになる。また、者台村では、毎年陰暦3月の最初の蛇の日にあるアマト祭りが神林で祭祀が行われるまさにその日の早朝に、苗代田に行って種まきをしなくてはならない。それゆえ、種籾を水に浸すのは祭りの6日前に始めなくてはならない。種籾は一般に水の中に3昼夜浸したあと、水分をすすぎ落と

して、草果（デヘdeqheq）^{訳注5}の葉などで仕切られた竹籠の中に置かれる。毎日朝夕、1回ずつ清水をかけ、30℃ぐらいの所に置いておき、種籾から白い芽が出てきたら種まきができる。「3度言ったら古い話、3度会ったら顔なじみ、籾は3晩で白い芽がでて、さらに3日置いたら新芽が出る」という諺がある。

種蒔きの前日は必ず苗代田を整えなくてはならない。苗代田を整える順序は、まず犁起こして土を軟らかくし、水を撒いた後に、田の泥を特製の^{えぶり}杓で平らに均す。畦の下のほうに向かって1本の小さな溝を掘っておき、苗代田を整えた時に泥止めの板から水が溝に入るようにする。

種籾を蒔いた後は、芽が出てきたら3日は田を乾し、その後浅い水で3日置いて、また水を乾して3日置いておく。その後、昼は田を乾しておき、夜は水を入れておく。そうすることで、鼠



写真12-1 家屋の傍らでの堆肥作り



写真12-2 肥を水に流している様子

害や春の寒さによる害を防ぐ。苗に3枚の葉が出てきて、苗が半分水に浸るようになるまで、こうした苗代田の水の管理を繰り返す。40日経ったら苗を抜き、田植えをしたら水はもう撒かない。

4 水で押し流す施肥の方法

ハニ族の灌漑する棚田の水は村落の上方の森林の沢の水で、溝渠は上流から下流へと村の中を経て田の間を流れる。棚田の上方にも下方にも同様に取水口があり、上から下へ、上が満ちると下に流れ、絶えることはない。一種の流水のエコロジーによる栽培法というべきであろう。哀牢山区の道は険しく、棚田の肥料を運ぶのは困難である。ハニ族は山の凹凸の激しい複雑な地形のため、特殊な施肥の方法を創り出した。それは水で押し流す施肥の方法で、上から下へと流れる溝渠の水を使って肥料を田に入れる方法である。ハニ族は普段から家の傍の肥溜めで自家製の肥料を積んでおり、それは長い年月が経って、真っ黒に発酵しており、効果の高い肥料になっている。毎年田植えの前の季節、それは田植えの10日ぐらい前の時期に、村を流れる溝渠の水を放ち、真っ黒な肥料の入った水を田に

流し込む。それと一緒に棚田の犁起こしと代掻きをする。この水で施肥をする方法は1980年代

^{訳注5} ショウガ科シュクシャ属の一種、果実をソウカ（草果）と呼ぶが、日本にはない。「草果」 Amomum tsao-ko Crevost et Lem. 下痢、悪寒などの薬草で、料理に使ったり、燻して獣よけに使ったりなどハニ族の間では広く使われており、近年は輸出用の商品作物としても注目されている。

の初めごろ、家庭生産責任制が実行されて後はほとんど使われていなかった。それは棚田が自分の家から遠いので、肥料の入った水が目的地までなかなか届かなかったためである。しかし、各家々がこの方法で流すようになり、あるハニ族の村ではこれが最近流行するようになったという。2004年10月21日、筆者は元陽県の箐口民俗村のフィールドワークに来たところ、午後2時前後に丁度その村の張志光氏の家が、普段から溜めてあった家禽家畜の糞便を入れた池の堰を掘り崩して、村内を流れる溝渠に入れていたところだった。筆者は溝渠に沿って田の間に行ってみたが、真っ黒な水が村の下流へ2,000メートル、100平方メートルの田地に広がり、途中で他人の田の取水口に入ってもその泥水とともに目的地まで流れていった。主人の大きな田では稲株を犁起こし、畦を新しくして、元々田の水を放出しており、その水は村の下の真っ黒な水とともに水田に流れ込んでいた。もちろん、棚田の収穫が終わり、稲株を肥沃な田に入れるとか、田植えの時に肥料の入った水が流されるというのは土壌の地味を増強する方法である。これはハニ族の棚田エコロジーの持続的発展が反映されたもので、大いに称揚すべきものなのである。

ハニ族の本田には人がする施肥はとても少ないけれど、自然の施肥が存在している。かつて、人々はハニ族の棚田は施肥をしておらず、衛生的な田ではあるが、ハニ族の棚田の欠陥と粗放さだと説明していた。しかし、それはハニ族の棚田の農耕のシステムに対する深刻な認識不足というべきであろう。毎年収穫が終わると畦の雑草を田の中に鋤き入れ、畦が整うと、稲株や雑草を田に入れて半年近く田を養う。このようにして雑草と稲株が田の中で腐敗して有機肥料ができる。この他にハニ族は普段から牛馬を山野に放ち、家畜の糞を山野に積んでおく。その腐葉土が毎年6、7月の雨季の大雨の時に山の上から村内雨水と一緒に自然に水肥として棚田に流れ、自然の施肥となっているのである。

IV ハニ族の棚田の耕作道具



写真13 犁(左)と耙(右)

1 棚田の農具

ハニ族は棚田で耕作するとき、一般に犁、耙(写真13)、鋤(写真14)、斧、鉞、曲形鉞(写真15)、鋸鎌、刃鎌、ハンマー、鉄槌、杵(苗代均し板)、脱穀船、麻袋、背負い籠などの生産工具を使う。鋤は、田を掘り、掘った土地を均したりするなど、ハニ族の農耕活動の中で重要な効力を発揮する。ハニ族の家には1人に1ずつは鋤があり、鉄製であり、柄のところは木製である。棚田の作業では普通、板鋤か条鋤が用いられる。板鋤には四角形のものと三角形のものがある。鋤

刃の部分は、三日月形のものや半月形のものがあり、三日月形のは、土を耕したり畦を整えたりするのに使う。半月形の板鋤は畦の壁や角を整えたり土を掘ったりするのに用い、条鋤は棚田を新たに開墾するのに使う。鋤刃は金物屋で買ってくるが、柄は自分で作る。2004年8月筆

者が元陽県の箐口村で行ったフィールドワークの記録によれば、同村の張明華氏が使っていた三日月形の鍬刃は大きなもので、長さ30センチ、幅18センチ、重さ3キロ、柄の長さ100センチ、柄の重さ1キロもあった。小さなものでも、鍬刃の長さ28センチ、幅14センチ、柄の長さ110センチであった。半月形のものも鍬刃の長さ30センチ、幅15センチ、柄の長さ100センチであった。条鍬は鍬刃50センチ、柄の長さ95センチ、重さ2.5キロであった。



写真14 鋤類

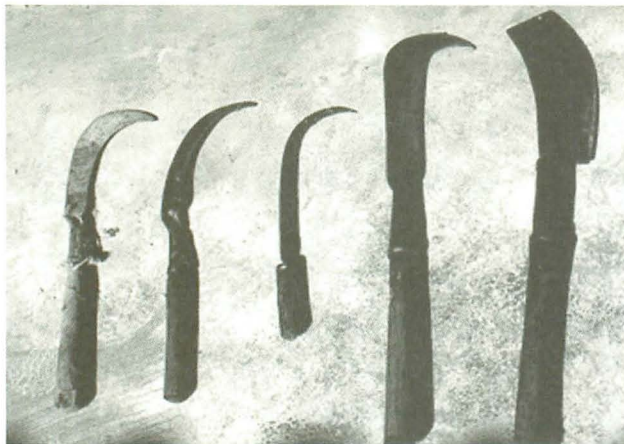


写真15 鎌（エマyeiqma）と
鉞（ミヤゴmiavhhovq）

がある。大きなものは長さ250センチ、幅60センチ、高さ30センチもある。小さいものでも長さ180センチ、幅40センチ、高さ25センチの大きさがある。脱穀船は太い喬木を削って作り、普通オガタマノキなどの喬木を選ぶ。使う時は紐を船のへさきにつけて、1人1台持って、田の水を従ってそれを引っ張って動かす。操作する時はさらに船の両側に竹で編んだ幅120センチの蔦を挿し込み飛ぶ羽根のようにして、脱穀した粃が船の外にでないようにする。船の両端には脱穀用の枕木が置かれ、2人で決まった量の稲束を両手で持ち、枕木の上にぶつけて脱穀する。

ハニ族の各世帯にはみな1対の犁と耙がある。犁は鉄と木を組み合わせて作られており、鉄の部分は犁の刃の部分で、取っ手と轆(ながえ)、支えの部分は木である。一般に1頭の牛が引けるのは、1日に2畝(約13a)ぐらいである。耙は木でできており、耙梁、耙齒、耙杵と取っ手からなっている。耙齒の数は耙梁の長さに関係しており、牛1頭の場合、普通は7～9齒で土を砕いたり土を均したりできる。箐口村の張明華氏が使っていた犁刃は長さ33センチ、幅30センチ、鉄板部は長さ32センチ、幅24センチ、木の部分の柄の長さが120センチ、犁の轆は長さ130センチ、取っ手は20センチ、牛革の紐が2メートル、全体の重さは10キログラムである。耙の齒は9齒で、耙梁の長さ100センチ、耙杵の高さは50センチ、耙の齒の長さは23センチ、取っ手は54センチであった。

鎌は鉄で出来ており、刀口型と鋸齒型がある。形は直線形と三日月形があり、直線形の鋸齒鎌は専ら刈り取り用で、三日月形は刈り取りと除草に用いる。鉞は、鉄の部分が約40センチ、幅5センチ、柄の部分が40～60センチで、畦の草取りや蕎麦畑の耕作に用いる。

脱穀船（ディガdiqhal,ジビjiqipil（元陽方言）：写真8、16）は、木で出来ており小舟のような形をしているのでこの名（「谷船」）



写真16 脱穀船での脱穀

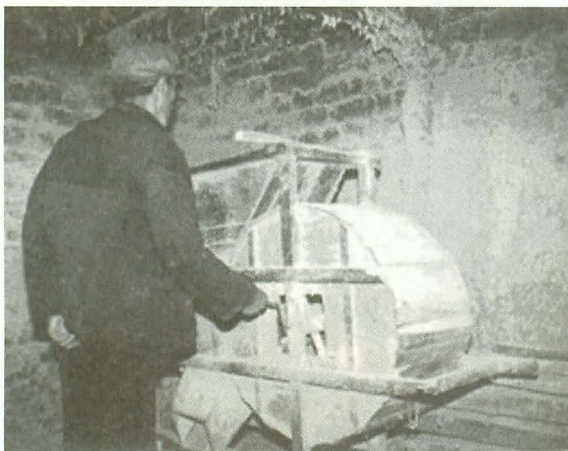


写真17 唐箕

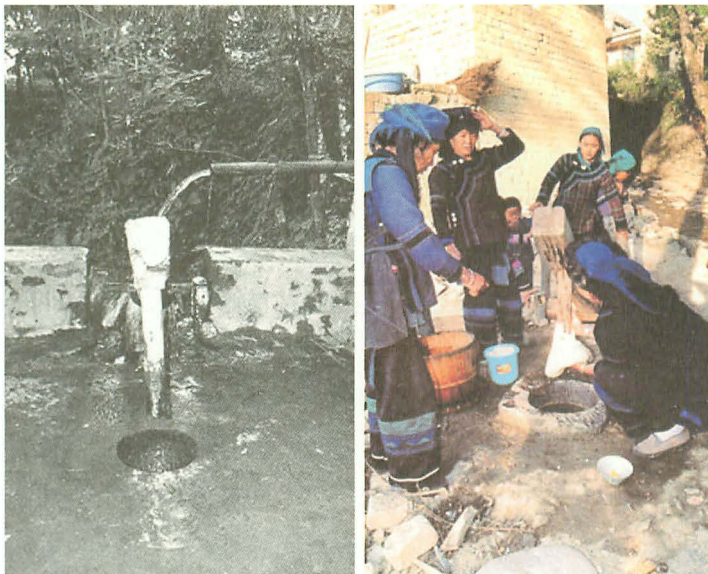


写真18 左：脚碓（メツオmeicaol）
右：水碓（ウチュメツオeelquvq meicaol）

この他、畦を整えるのに使うスコップ、米を運ぶのに使う麻袋、ハンマー、開墾したり水路を修理したりするのに使う鉄槌がある。

2 稲の加工道具

加工工具には脚碓（写真18左）、唐箕、水碓（写真18右）、水力磨、石臼（写真19）、水碾（写真20）、篩、箕などがある。唐箕は木製で円形の箱の中に木の軸があり、軸に4～6枚の羽板が固定してあり、軸の両端に湾曲した柄がついていて人力で柄を回し、それと一緒に羽板が回り、風が生じる。上から籾や雑草を入れると、籾殻や稲藁が箱の内側から外に向かって吹き出されていき、米が下に落ちていく。歴史的には、ハニ族は唐箕を一般にはまだ使っていなかった。箕を使って、人力で風を起こすなどして籾殻や稲藁を飛ばしていた。

水碾はハニ族の地域で水力資源を使う工具としては比較的複雑なものである。民国時代に広東・広西から入ってきた。1881年生まれの元陽県逢春嶺郷猛多村の李学氏は1903年の稿吾土司に軍

事制圧された後、兵とともに広東・広西に入り、当地の水碾（水力回転臼）の技術を学んだ。1922年に帰郷後、元陽県小新街に第1号の水碾を設置した。山地の特性に合わせて、広東・広西の並列式を改変し直列式の水車にして、当地の水力資源を十分活用できるようにした。このようにして水碾を使った水力精米の歴史が始まったのである（元陽県志1990:665）。水車小屋は水路、水車、水車の梁、立車、平車、中柱、伝動梁、下水傘、転がり梁、碾石、碾槽などの部分からなっている。そのうち引水をする施設と水車は小屋の外

にあり、水車の梁は小屋の中から外に伸びている。2006年元陽県の小新街には3台の水碾があったが、村民が持って来た1槽100キロの米を精米するのに水力が十分な時は伝統的な品種なら1.5時間、交雑種の新品種では2時間かかった。

水碓が導入される前は、脚碓が精米や麦粉の加工工具であった。中型の脚碓の棒は直径20センチの木材を方形に加工したもので、棒の長さが240センチ、軸の長さ70センチ、中間部分の直径15センチ、両端が約8センチ、足踏み板が幅15センチ、長さ80センチ、杵の直径8センチ、長さ60センチ、臼は口径35センチ、深さ26センチであった。



写真19 石臼（ジルjivlu）

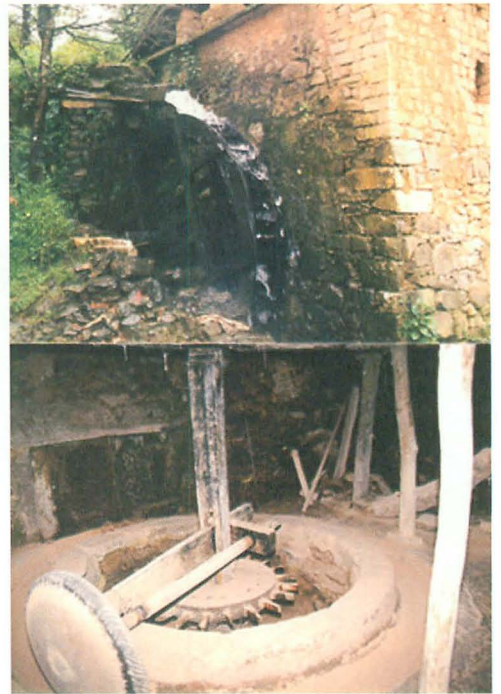


写真20 水碓

V ハニ族の棚田の灌漑システムと管理

1 溝渠の修築

棚田の灌漑システムは棚田文化の重要な景観的要素である。哀牢山の地質構造は岩がちでばらばらになり易く地形や地質が複雑である。そのため水利にかんして、ハニ族は溝渠の修築を行ってきた。高山の溪流を引きそれを集めてできた河の流れで棚田の灌漑をしている。紅河の流域の紅河県、元陽県、緑春県、金平県の4県の中を流れる本流と支流は43ある。流域面積は11万平方キロメートルで、年間平均水量は毎秒30～50立方メートルである。これらの河の中で、渇水期の水量が最大の川は毎秒15.5立方メートルで、最も少ない川でも毎秒0.5立方メートルはある。歴史の上では、ハニ族は溝渠を掘る時、地勢を利用した特殊な「流水開溝法」というべきものを発明した。溝渠を開く時に目測で溝を掘る線を決めて、そこに施工中に放水するのである。溝渠を掘る過程で大きな岩があると、木材を燃やしてその岩を焼き、その後水で冷ますと、物性的変化で岩に亀裂ができる。溝渠の権利所有については、その土地の土司が命じて作らせた場合、土司の所有で、村民たちが自分で資金を集めて作った場合はその村民の所有である。田間の小さ

な溝の場合は、受益者が自分で掘り、それは私人の所有となる。『元陽県志』の記載によると、清代の乾隆五十二年（1787年）、元陽県の老克、糯咱、絞緬の3村で話し合っ、壁甫河の源（現在の製紙工場の所）に溝渠を掘った。3村は全部で160両の銀、米を48石（1石は約150キロ）、塩80キロ、作業員1,000人を投じたがそれでも溝渠は開通しなかった。嘉慶十一年（1806年）に3つの村が合議して、さらに溝渠の修築をすることとし、「1口」（「口」は分水板で計る放水量の計量単位）あたり粃75キロ、銀180両、米20石、塩50キロとした。2年の努力の結果、終に長さ15キロメートル、水量毎秒0.3立方メートルの糯咱溝が開通した。これが、人々が労力、資金、資材を出し合っで作った元陽県で初めての水路である（元陽県志:150-151）。

歴史的には、ハニ族には水路の管理を統一した機構はなかった。明清から民国期まで、普通はいくつかの村で共同受益をする溝渠にはみな固定した管理者がおり、受益面積の大小で水を分け、水の分だけ米を取るというやり方か、管理人分の稲を公田に植えて報酬として支給していた。溝渠の改修は、それほど大変でなければ管理人が自ら行い、比較的大きな工程であれば受益村が資金と労働力を出し合っで行う。水争いが起きると、その地の土司、里長、ジョバ^{訳注6}、村落の長老たちで話し合って調停した。納更土司の直轄地では「官溝」があり、そこでは分水板で水を分け、応分の粃を納めさせた。「1口」あたり2.5斗（37.5キロ）で年間20石（3,000キロ）を納更土司に納めた。建国直前まで元陽では主要な水路は地主や富農が持っっており、田に応じて課税し、年貢米を取り、小作人に管理させていた。公用の水路は村民が選んだ水路長が管理し、分水板を使っ水の水の分け前に応じて米を納め、溝渠を改修する時は受益世帯で分け前に応じて働いた。水路長は毎年1回、会を招集し溝渠を祭る会食をし、管理の業務や水路長の改選、管理制度の改定などを話し合っ（元陽県志:150-151）。

1949年にこれらは終わり、紅河、元陽、緑春、金平の4県で建設、改修された水路は12,350本にのぼり、灌漑された棚田は30数万畝（約20,000ha）になった。1951年、国家は統一的な計画を実行し、各級の政府組織は建設の実施にあたり、現代的な工具を大量に用いて水路建設を一定の質と規模にした。各県の県誌類の記載によれば、1985年までに上述の4県で建設改修した水路は24,745本、灌漑面積は60数万畝（約40,000ha）になった。その中で毎秒0.3立方メートル以上の水量のある中核的な溝渠は125本ある。2004年の統計によると、紅河県には大小の水路が3,022本あり、その中で三面水路^{訳注7}が34本、毎秒0.3立方メートル以上の水量のある水路が20本、最も長い水路は22キロメートルある。元陽県には大小の水路が4,653本あり、その中で三面水路が12.13キロメートル、毎秒0.3立方メートル以上の水量のある水路が45本、最も長い水路は25キロメートルある。緑春県には大小7000本余りの水路があり、その中で三面水路が21本、毎秒0.3立方メートル以上の水量のある水路が13本、最も長い水路は65キロメートル（黄連山水溝）ある。

2 分水板による水の分配

昔から今に至るまで、ハニ族の棚田の灌漑システムにおける水源管理の最も有効な方法は、分水板によって水を分けるというもので、この方法で水を分けことをハニ語ではウテテ eeltevq

^{訳注6} 土司制度のなかで土司の末端にあった村落レベルの頭目。

^{訳注7} 両側面と底面をセメント施工した水路のこと。

tevgという（写真21）。これはハニ族の長きにわたる棚田耕作の経験の集大成であり、棚田の水利システムの重要な目印であるとともに、棚田の持続的発展の生命力を示している。



写真21-1 分水堰による分水



写真21-2 分水堰

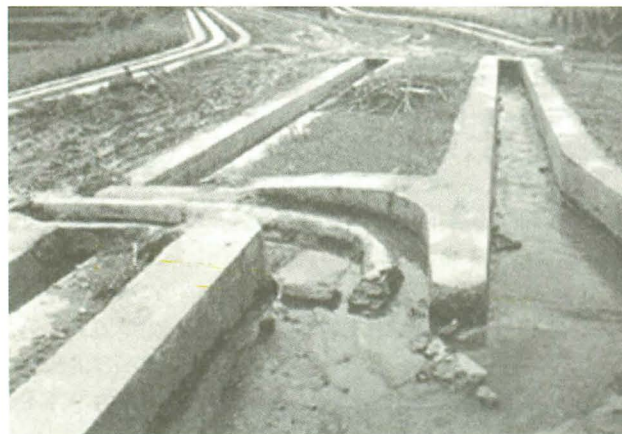


写真21-3 分水堰

李国発と宋恩常が1959年の1月に金平県馬鹿塘のハニ族の村で行った水路管理の調査によると、分水板による水の分配の受益世帯には2種類あり、大口のは10センチ、小口のは5センチであった。大口の世帯は5斗（約75キログラム）、小口は2.5斗（37.5キログラム）の粉を納め、わずかな水を取っても15キログラムを出さなくてはいけなかった（哈尼族社会歴史調査:8）。

1988年、筆者は元陽県の黄草嶺郷の哈更村でハニ族の水路管理の調査を行った。その村は367世帯、1,596人で1,008畝（約6,720a）の棚田を営んでおり、海拔700～1,500メートルのところに分布している。主な水路は6本、管理人は6人いた。管理人は村民で選挙をし、「溝頭」（ロガファボlolgalhuaqbol）と呼ばれていた。「溝頭」の任期は1年で、再任もかまわない。水路の受益世帯は毎年、田植えの時に溝を祭り会食をする。この時に分水板の口の大きさについて整理し、水路管理のこと、「溝頭」の改選、管理制度の徹底、違反者の懲罰などについて話し合う。一般に、分水板の刻みの大小は田の面積に関連しており、60センチの刻み目で52.5畝（約350a）灌漑できる。刻み目が30センチだと26.5畝（約177a）で、75キログラムを報酬として「溝頭」に納める。分水板の刻み目の大小には固定的なやり方はなく、各地で大きさはまちまちである。一般に刻み目の幅には大変な注意が払われるが、刻み目の深さは一般にあまり注意されていない。

分水板による水の分配はハニ族が長い棚田農耕の歴史のなかで形成してきた一種の成文化されていない水についての規範と制度である。その形式は次のようである。1本の溝渠

が灌漑できる棚田の面積に基づいて、村と村、世帯と世帯のように田を所有する集団同士が相談

し、全員が一致することを前提とする。その前提に立って溝渠上流、中流、下流の順で棚田と溝渠の結合部に横木を設置し、棚田に必要な水量に応じた刻みを入れ、分水板に刻まれた刻み目から自然に棚田に水が入るようにする。枯枝や枯葉が塞いだ時は責任を追究しないが、もしも人が塞いだ時は、刻み目を大きくしたり、その人の田の水が少なくなるように横木を移動したり違反行為として罰則を加えたりする。上述の哈更村では、1997年5月の穂が出始めるころ、1人の村民がこっそり刻み目を大きくし、75キログラムの粉を罰せられ、同じ溝渠を使う世帯で集まって会食に使った。歴史的には、世帯と世帯の違反については村民が集合して合議し、村と村の違反は頭人と頭人が集まって取り決めていた。これはハニ族の村と村、世帯と世帯の間で、用水が引き起こす紛争を避け、合理的に用水を確保するためのものである。これにより安定的に農業をするという目的のために、世代から世代に受け継がれてきた水の掟であり、ハニ族の棚田の持続的発展に良い効果を発揮している。

VI ハニ族の節日と棚田の農耕儀礼

節日や祝宴は民族の伝統文化を継続発展させる主要な伝承のカプセルのようなものである。ハニ族の節日は宗教的祭祀でありながら、また農耕儀礼でもある。伝統的なすべての節日は必ず農耕儀礼とともに宗教祭祀を行わなければならない。宗教祭祀の目的は人、穀物、家畜の健康、増殖、発展である。それゆえ、祭祀と農事は往々にして混じりあっている。ハニ族の主要な節日は、年始の節日、祭祀の節日、農事の節日、収穫の節日等にわけることができる。

1 年始の節日

ハニ族の年始の節日は、ハニ語ではザテテZalteil teil ガトトGaltaol taol ツェラフシザ Ceilla hoqsiivq zaq (十月年) ガタパGaltaol palなどと称している。各地のハニ族の名称は同じではないが、ハニ族の暦法では陰暦10月が年始であり、そのため漢語では「十月年」と訳している^{訳注8}。紅河南岸のハニ族は一般に毎年陰暦10月の最初の「十二支」^{訳注9}の龍の日に始め、猿の日までの5日間行う。この節日の最大の特徴は各家々で湯円(甘く煮た白玉団子)を作り、餅を搗くことである。余裕があれば豚を殺し、年を越す。豚肉、鶏、魚などを市場で買ってくる者もいる。祭事の間、農作業などはせず、山から青い葉を摘み取って帰ったりしてもいけない。

緑春県のハニ族は陰暦10月の最初の兔の日を大晦日とし、その日の午前中は村の中を掃除し食事道具を洗う。午後は各家々で餅を搗き、小さく丸くした3つの餅を祖先に捧げた後、人々はそれを食べてよい。その晩は各家々で湯円用のモチ粉を搗いておく。翌日の龍の日が年始めで、雄鶏が鳴くのを聞いたら、女性たちはまず井泉に行って新しい水を竹筒に入れてそれを背負って家に戻り、その「新しい水」で湯円を煮る。男性たちは1羽の雌鶏を殺してそれを煮た後、湯円、鶏肉を2つの碗に盛る。供物台にそれを左右の端に置く。これは、左の碗がその家の祖先への、

^{訳注8} ガタパは西双版納州を中心とするアカ種族の人々の年始の呼び名であるが、現在は陽暦1月2日に統一されている。元々の日取りは各村で決めており、陰暦十月でもなかった。

^{訳注9} ハニ族は漢族の十二支と同じ(アカはやや異なる[稲村1997参照])動物の配列を使うが、十干という概念はない。そのため本来「干支」という概念では捉えられていないため「辰」「申」などの字を避け、「龍」「猿」という字を使った。原文も同じである。

右の碗が母方の家の祖先への供物であることを表している。祭祀が終わると、全員で湯円を食し、これは新しい年の一家の睦まじさを表している。

当日は豚を殺すが、場所によってはまず全村で1頭の豚を殺して祖先に捧げた後、各家で殺すところもある。全村で殺す豚は村の共用の太った豚でなくてはいけない。午後の宴会が始まる前、半碗の飯にスープをかけ門の外に持って行き、芭蕉の葉の上にこぼす。これは、供物台に置くことのできない正常な死に方をしなかった亡霊への供物である。祖先への酒と茶を竈の横にこぼし、祖先に捧げられた肉を年齢の順に1人ずつ分け与え、祖先の庇護が与えられたことを示す。祖先を祭るごとに、一家は皆で供物台に向かって跪く。

2日目（蛇の日）に嫁は里帰りし年始回りをする。彼女たちは青い芭蕉の葉に包んだ餅、酒、豚肉などの土産を背負って、実家のリネージの父系の男性たちにそれを配り、1軒1軒の供物台の前に跪き頭を垂れる。その後、実家に娘たちを呼んで食事をし、その日に土産を持って嫁ぎ先に戻る。2日間過ごして帰るところもある。



写真22 肝臓占い
(記者撮影 元陽県1998年)

2004年11月21日から22日にかけて、筆者は緑春県の大興鎮の牛洪村の「十月年」に参加した。21日が陰暦10月の最初の龍の日であり、午後6時ごろ各家々では門の前で火を焚き、1羽の鶏（雄鶏でも雌鶏でもよい）を屠り、竹で編んだ食卓にお茶、酒、清水を1碗ずつ置き、清水の碗の中に鶏の血を入れた。男主人は鶏の羽毛と内臓を処理して洗浄した後、鶏を丸ごと煮て大きな碗に入れて竹の食卓に置いた。その後、鶏の血の入った碗を煮えた鶏の肝の入った碗と取り替えて、男主人は竹の食卓に向かって跪いた。これは正常死しなかった亡霊に家に入ってこないように、

彼らが祟らないようにすることを表している。祭祀が終わると家人は門口で食卓を囲み夕食を取った。

22日は陰暦10月の蛇の日の朝、まず大小のミグmilguq^{訳注10}が3人やってきて儀礼用のシーソー場（写真34）で火を焚き、湯を沸かして村の共有の太った豚を1頭殺す準備をした。各家々から1名の男子が続々と出てきて、ミグが豚の毛と内臓を処理し、肉を各世帯で均等に分配するのを手伝った^{訳注11}。ミグ（宗教的村長）の陳忠明（ハニ語名Jumeeq）は、次のように挨拶した。

^{訳注10} 村の宗教的村長は、一般に世襲で息子が継ぐ場合が多い。現在、行政的村長は別におり、村落儀礼を行う以外に何らの権力を持たないが、村人からは敬意を払われている。息子が助手をすることが多く「小さい」ミグ、ミグ自身を「大きい」ミグと呼ぶ。

^{訳注11} ここでは世帯に均分に配分されているが、同じ元陽県でもリネージごとに均分に配分するところと世帯に均分に配分されるところがある[稲村2004a,2004b,2010]。以下の文章でも度々、各「家」で儀礼用の豚が均分に配分されるという表現が出てくるが、この「家」が世帯を表すのかりネージを表すのかは漢語の原文からは判別しにくい。

牛洪村は人口400余人110戸、太った豚を買う費用として1世帯15元を徴収し、今年買った豚は104キロ、合計の費用は1040元でした。残った金は次回使うことにする。8時40分ごろ豚の腹部を切って肝臓を取り出し大きな碗に入れ、小屋^{訳注12}の中の供物台の上に置いた。約10分後、ミグは豚の肝臓をみて来年の吉凶を占った。これと同時に、各家々の家庭の主婦は特定の井泉から「新しい水」を伝統に則って、竹筒で運んできたが、近年はプラスチック容器に変わりつつある。手伝いの男たちはシーソー横の小屋で豚肉を分け、ミグに報酬として前足1本とあばら肉2本とその他の部位を象徴的に少しずつとって捧げた後、残った肉、骨、内臓から血に至るまで各世帯



写真23 チェラフシザ「十月年」の餅つき

に均等に分配した。9時15分ごろミグは豚の下顎の骨を取り出し、シーソー横の小屋の中の古い下顎とともに吊るし掛けた。陰暦1月の山神の祭り、5月の休み日などの節日に殺した豚の下顎はみなここに掛けてある。10時に豚肉は各世帯に肉と骨はその良し悪しも含めて均等に分け終わり、さらに竿秤で計られた。各世帯は特別にしつらえた籠に自分たちの分をとって家に持ち帰り、家の中で煮て祖先に捧げた。

豚肉の分配が終わって、筆者は付近の農家に行ってみたが、女性が餅を丸めているところ

で、その1つを私に食べさせてくれた。大ミグの陳忠明に連れられて彼の家に行った。彼は次のように説明した。掟により祖先祭祀は蛇の日の朝夕に1度ずつ行い、さらに馬の日にもう1度行う。しかし、現在は蛇の日の朝だけというところもある。大きな祭祖台にまず箸を1膳置き、その後、茶、酒、肉、餅(3個で1碗)、飯を1碗ずつ置く。祭祀の主人が頭を下げ、家人たちもそれに従い頭を下げる。その後、供物を小さな祭祖台に移し、正常死しなかった人の霊



写真24 ツェラフシザ(「十月年」)の長街宴
(訳者撮影 紅河県甲寅 2002年12月)

に捧げる。

十月年の伝統によれば、蛇の日の朝、嫁いだ娘は実家に戻って年を越し、娘はおこわ1包み、

^{訳注12} 漢語で「秋房」と書いており、儀礼用のシーソーのある広場にある小屋である。ハニ語ではアチョ hhaqaolと呼ばれ、集会所としても使う。

2かけの豚肉、鶏卵1個、1斤の酒を持ち帰る。実家から嫁ぎ先には、おこわ1包み、鶏1羽を持ち帰り、もし娘がその年に嫁いだばかりなら更に豚の腿1本が加わる。けれども、牛洪村の里帰りは多くは遅くなって春節ぐらいになっていることが多かった。

2003年11月3日～8日、筆者は同じように紅河県甲寅郷咪田寨のハニ族の十月年に参加した。これも陰暦10月の最初の兎の日を大晦日とし、その日の日中は豚を殺し、晩は茶、酒、飯、豚肉を各家の祖先に捧げた。翌日の龍の日を元日とし朝食と夕食の前に前述の供物を捧げた。家によっては豚肉を鶏肉に換えているところもある。新年2日目の蛇の日、嫁は里帰りして年を越し、土産として少なくとも半斤の豚肉か鶏1羽、1斤の酒を持ち帰り、帰ったらそれを煮て祖先に捧げる。里から婚家に戻る時は少なくとも餅を3個は持ち帰らなければならない。また、その日から4日目(羊の日)までに客を呼んで食事を振舞わなければならない。猿の日から犬の日、つまり正月5日から7日には「長街宴」が開かれる。村全体の世帯を平均に3組に分け、各組は各世帯が1卓ずつ食べ物を出せるように責任を負っている。村の大道で村人にそれを食べさせるが、漢語では「街心宴」とも言っている。貧しい世帯もあるので、主なメニューは6種類までとし、一般に豚のレバー、豚肉(赤身か脂身)、鶏肉、魚、鶏卵、肉の炒め物か煮物で、それに野菜の碗と漬け汁の碗が加わる。「街心宴」の食卓数は日を追うごとに1～3卓増える。それは、人、作物、家畜が増えていくことを意味する。咪田の十月年の間に行われる「街心街」の習俗は、昔から今まで続いてきた。その意味は、村人全員を招いて家で年越しを祝うことは出来ないためそうするという純朴な家での宴会の形式であり、また山の中の鳥などの動物も呼んで一緒に年越しをしようというものである。村人同士で相互に祝福しようということとともに、自然との調和への一種の願望ともいえよう。

十月年の祭祀は家庭を単位として行われ、その内容は神霊と祖先への祭祀である。一般に男性が祭祀を司るが、場所によっては女性が司ることもある。主に豚肉、鶏肉、餅、湯円、茶、酒を供物として捧げ、何れにせよ順序はまず箸1膳、茶、酒、肉類、飯またはもち米で作ったものの順である。まず、祭祀を司る者が象徴的にそれを食し、その後家人が食す。これは祖先や神霊の庇護を表す。地方によっては、元日に湯円を祖先に捧げた後、人が食べる前に、まず少しだけ牛に食べさせるところもある。苦楽を共にした耕牛に棚田での農耕の慰労を表している。暦法からすると、十月年は年始めであるとともに冬に入ることを意味する。その活動内容からみると、それは盛大な祝賀であり、時期からすると穀類も倉に納まった頃で大地への感謝を反映しており、それはハニ族の人と地に対する思想でもある。

2 農耕節日

ハニ族の祭祀と農事が結合した典型的な節日がアマト、カオポ、ミネナ、デロホ、クザザなどである。

(1) アマト

アマトHhaqma tulはプマトpuvma tul アマオhhaqma aolアマトウオ hhaqma tuolとも呼んでいる。アマとは hhaqmaハニ族の村落の安寧と発展を守るために妖魔と戦い犠牲となった母とその子供達のことである。伝説では昔、大妖魔がいて毎年人間に食べるために2人の娘を要

求していたが、1人の母親がその娘たちが妖魔に食べられないように、自分の息子2人を彼女の家に送った。「お前たちは女装して妖魔に会い、妖魔の酔いが回るのを見計らって人々のために殺しなさい」といった。後にそのことを記念し定期的に家畜を殺し英霊に捧げるようになった。身を捨てて村を救った彼らの精神を村落の「精神力」と「生命の源」とみなし、それは同時に作物と家畜の力の源でもある。トtulは「祀る」という意味である。この祭りは漢語では「祭寨神」と称し、神霊祭祀と農耕儀礼の結びついた、村落を単位とするハニ族の1年1度の厳粛な節日である。この節日の行われる日取りは「村建て」をした日に神林、神樹を選定するということに関連している。そのため、各村落でも日取りは違いがあるが、一般に陰暦の1月か2月である。元陽県小新街郷の者台村のハニ族が陽暦2003年3月6日～13日に行ったアマオHhaqma aolの活動を具体的に述べることにする。

村門を塞ぐ

これはハニ族のアマトの前奏であり、目的は追い出された妖魔が村に入ることを防ぐことである。者台村の「門封じ」は3月6日であり陰暦2月の最初の虎の日であった。昼の2時ごろ儀式を司るミグmilguq（宗教的村長）^{訳注13}とその助手の計4人は、1羽の赤い雄鶏と雄のアヒルを持って村の東側の門の前に立った。祭祀の伝統に従って、犬を1匹屠らなければならないが、犬の値段が高いので村民の負担の軽減のため、小さな犬の毛を抜いてそれに替えた。各世帯から1名ず



写真25 結界縄（元陽県新広坪 2003年 記者撮影）

つの男が出て、それぞれ2本ずつ薪を持って来た。ミグが鶏とアヒルを処理するのを手伝い、鶏の皮を頭から脚まで剥いで、木刀、木槌、木の銃を作って司祭（モピmoqpil）はそれに巫術を施した。稲藁で1本の「結界縄」を作り、村のなかの妖魔と邪気を村の外へ出すように道の入り口の両端の樹に渡した。それには鶏の皮が掛けてあり、村を守る金の鶏を示している。縄の上に

^{訳注13} ミグmilguqとモピmoqpilはいずれも通常は、異界と直接の交渉をしないという意味でシャーマン（ニマniqma）とは区別され、いずれも司祭（priest）であり、ミグは村落儀礼を行い、モピは葬送儀礼、祖先祭祀などの死者儀礼を主に行う。原文ではミグを司祭と訳して、モピをハニ語のままとしているが、ここではミグを宗教的村長とし、モピを司祭と訳すことにするが、訳語のみ使うとかえって分類を不明にしてしまうため括弧で説明し基本的にハニ語のままとした。モピは葬送儀礼を行うことのできる宗教的職能者の総称で、訳者の調査した村には40名ほどがいた。詳しくは別稿を用意する予定であるが、稲村（2003a, 2010）でも説明している。

は木刀、木のさすまた、木槌、犬の脚が掛けてあり、これらは村を守る兵器を示している。村の東、西、北には必ずこの「結界縄」がなくてはならない。

井泉^{訳注14}への祭祀



写真26 ハニ族の井泉
(2000年 元陽県箐口村 記者撮影)



写真27 神林での祭祀

ハニ族は人々が飲む泉の水は永遠に枯渇しないと見ており、深淵や泉の中にいる蟹や蛙を水神とみなし祀っている。3月9日の蛇の日の午前8時ごろ、大小のミグ2名および2人の助手は雄鶏と雌鶏を1羽ずつ持って決まった井泉横でそれを殺し祀った。供物として3碗の茶、3碗の酒、3碗の鶏の内臓、1羽の丸ごと煮た鶏、1包みの黄色く染めたもち米のおこわ、赤く染めた茹でた鶏卵1つを捧げた。供物を置く順序としては、まず茶を注ぎ、急須を使ってそれぞれの碗に3滴ずつ入れ、3番目の碗を除いた残りの2碗にはもう1度3滴ずつ入れ、急須に3滴戻した。次に同じやり方で酒を注いだ。丸ごと1羽の鶏の頭、脚、腹、尾から少しずつ切って碗の中に入れ、1碗ごとに3回ずつ入れた。こうして供物が並べられた後、拝礼が始まった。拱手して三礼、跪いて三礼した。2～3回上述のやり方を繰り返して、茶、酒、肉を加えていきもう1度拱手をして三礼した。最後に茶、酒、肉、おこわ、染めた鶏卵をほぐして、茶と酒を3滴ずつ注ぎ、肉、飯、卵をとって井泉の傍らの芭蕉の1枚の葉の上の3箇所にした。これは祭祀が終わって祭りに参加した人々が食事をして

もいいことを示している。そこを去るとき棘の有る樹で井泉の口を塞ぎ、ミグが竹筒に水を汲んで神林に行くまでの暫くの間、俗人が井泉の水を飲まないようにしておき、帰ってきたら棘の樹を除いた。

^{訳注14} 写真26のように湧水を溜めた水槽であり、一種の井戸ということもできるが、地下水をくみ上げるものではない。湧水地を石で囲むものと槌で水を引いて溜めておくものなどがある。本稿では「井泉」としておく。